

## 人類における情報の伝達（３） ——情報の記録化——

鈴木 徳 三

序 本稿は、『大妻女子大学紀要——文系』に、「人類における情報の伝達」を主題として連続投稿させて頂いた。この稿は、主題の順序からすれば三番目に相当する続編である。従って前号迄との関連があるので、稿を進めるに先立ち、それらの題目（細目は省略）、及び掲載誌をも加えて以下に紹介させて頂くので、御理解願いたい。

### 人類における情報の伝達

#### —情報の成立・伝播から言語及び文字の創出

大妻女子大学文学部三十周年記念論文集〈平成10年（1998）3月〉

### 人類における情報の伝達（２）

#### —情報伝達の手段

大妻女子大学紀要—文系 第31号〈平成11年（1999）3月〉

尚、本稿は、悠久の太古に遡る記述とあって若干の年史、文献を照合すると、年代、表記に異同が多いようであった。そこで諸説の妥当するか否かは別として、本稿の意図する視点に近い事、年代に関わる記述の一貫を目して“松岡正剛監修：情報の歴史 90'”を主とし、必要に応じ他の文献を引用する事とし、“ ” 内で示す。但し、『情報の歴史』からの引用は典拠を省略し、その他の文献からの引用のみとするので御承知されたい。

## 記録化の必要

情報の記録化が実現するに当たって、それを必要とする事情、理由があった。これらの主だった分野として、宗教関係、農事関係、交易関係、天文関係、行政関係に分けて考えてみることにした。しかも記録化の必要性を追求している内、シグナルからシンボル化への推移変換の重要性に着目するようになったのである。まだ充分な検討や把握ができないが、一応の所見として御批判頂きたい。

宗教関係 人類との深い関連の初出は宗教で、12万年前“旧人に死の観念と丹色の神聖視（死体埋葬と丹土散布）”が、最も顕著な信仰の創始であり、同じ頃“お守り、儀式用祭具の萌芽”とあるが、現今でも日常行なわれる慣習は、夙く行なわれた。10万年前になると“幼児の特別な埋葬”が施され、育児を通しての身内の愛情、途中で絶えた哀しみの表れと解したい。死者への悼みは、

5万年前“現存最古の墓碑（仏）”と哀悼の意が“埋葬場上の円石”として具体化し、間もなく“石囲墓地と献花（イラク）”、いずれも場所は離れているが洞窟内での発見であった。以降、供物、飾りと多様化する。注目に価いするのは、史上初の大集落イエリコでは、1万3000年前、“集落周辺の集団墓（日常品、装飾品の副葬）”とあるが、多くの資産投入なくしては実現できない葬祭であろう。これより少し後の8500年前、同じイエリコでは、“円塔、神殿の施設”の建設に至る。当時、大集落イエリコは経済発展の頂点であり、その財力の豊かさが神殿等の創設を可能とした。更に信仰の中心に神官が居り、集落の進歩に応じて儀礼に要する余剰物資を據出させ、多くの貯えとしたのが神官である。彼等としては、集まった物資についてその呼称、数量を把握し、これらの内容を確保するために、記録化の必要が生じたのであった。尚も葬祭が拡がり、貯える資産も増大するので、記録化の必要は益々重要となる。神殿の管理・運営は、当初より神官の責任・義務であり、資産の運用も神官の責務の一つである。これら諸事万端にわたり統制できる神官は、神殿に関わる統制力、即ち神殿における権力の保持者である。従って貯える資産の増大は、その神官の有する権力の増大ともなる。言い換えれば、権力の増減は資産を示す記録化の内容如何であった。

時代は進み、BC5600頃“バルカン、ドナウ下流域に共有の礼拝施設をもつ集落出現”があり、更に、BC3400 豪華とも見える“ウルク市に白神殿”BC2980“階段ピラミッド出現”、BC2800“シュメール諸都市に神殿建設”と各地に続々と神殿都市が設けられる。これら神殿都市に関し、

“シュメール都市の政治・経済は神殿によって担われていた。支配者は聖域者でもあり、また市内の土地や人民は、原則としていずれかの神殿に所属したことになる。いわば都市は神殿組織の複合体である”<sup>①</sup>

との説がある程、神殿は栄え、神官の地位は益々高くなっていく。この動向は、BC2490 太陽神アラーを祀る“神官団権力をえる（エジプト）”は神官の地位向上の証しとも言え、BC1352“神官アイ即位（エジプト）”は、神官の地位でありながら王朝を篡奪し、政治権力を把握するなど、神官の権勢を如実に示している。

この時代における歴史的展開にあつては、神官の存在が大きな意義があつた。しかも本来の祭祀を司る聖職者としての働きよりも、資産運用による神殿建設した貢献を高く評価したのであった。神殿建設の資金となった莫大な資産は、遙か以前より余剰物資の一部が據出され、貯えたのであった。この経緯にあつて役立ったのが、記録化である。物資の提供による“情報”を抽象から具象へと推移させ、記録化された事は多くの支持を得た。これらの記録化された“情報”による膨大な物資が投入され、神殿建設が次々と施工され、神殿都市が数多く出現したのであった。

**農事関係** 人類にとって、生命の維持に直結する実生活は、食糧の入手が最初の課題であつた。まず周辺の野生植物の採集、小型動物の狩猟に始まるが、血縁による生活共同体としての家族組織の時代である。やがて人口増となり、食糧確保の増加に迫られ、これへの対応に迫られた人類は、野生依存から自作の農耕を開始、共同作業、更に、より水分を要する灌漑開発もあり、農耕は進歩し始めた。

それぞれの風土で生命の維持に汲々としていた当時の人類にとって、幸いにもこの地球上に、氷河時代の末期が接近、温暖化が訪れた。3万年前の頃、“ヨーロッパの草原化”となり、野生に依存していた実生活も、1万8300年前、“ナイル河谷に最古の穀物依存文化（エジプト）”があり、次いで1万7000年前“レヴァント地方に穀物採集文化開始”、1万4000年前“ナイル流域、近東各地に小麦自生地出現”、1万800年前、“レヴァントに農耕発生”と進歩した。間もない1万年前になると“西アジアに肥沃な三日月地帯形成”とあつて、豊かな地域が広がった丈でなく、BC8500



“初期農耕部落に自給自足の共同体形成”も実現、更に農耕技術は、BC5600 “メソポタミアの灌漑発達”し、農事が飛躍する。

共同作業としての農耕は、分担、割り振り、手順、日程など立案企画も難しく、加えて増量的規模による農耕であるので、予め割り当て、配分の推測計算、及び収穫の増加に伴う計量化の必要等、記録化の必要度は大いに高まったであろう。その後、BC6000頃、“西アジアの肥沃な三日月地帯に、大麦、小麦農耕と羊の牧畜を基盤にした文化体系成立”と農耕は進歩していく。

別の文献に拠れば、BC8000からBC7500頃、“西アジアの各地の初期農耕村落で家畜を数え、収穫された穀物量を量るためトークン・システム”が成立したとあり<sup>⑥</sup>、注目に値する。

**交易関係** 実生活としての食・住・衣を充足しつつあった人類は、農耕を中心に徐々に余剰物資を貯えられ始めた。若干の貯えのある余裕ある生活に恵まれると、当初は近隣仲間で、更に充実できると集落毎に相互の間で必要の有無に応じ贈与、交換がなされた。このような経済的関連が向上して交易となり、流通に至る。交易にとって重要な事項は、契約者の交渉である。その場その場での処理で済むならば契約の必要はないが、口頭による取り決め、大量の物資、経済価値の高い取引等は、契約の証しが是非とも必要である。この必要を満たす手段として記録化の必要性が生じたのであった。

1万2000年前、“キュクラデス諸島の黒曜石、バルカンに流通”が初見であるが、この黒曜石は、黒色乃至褐色で著しい光沢のある石で、石鏃、石銘に用いられ、その美しさは、装飾用に用いられる処から、高い経済価値が附価され、流通の主な対象となったのであろう。BC1100になるに及び、流通の規模が拡がり、“パレスティナの貿易センター化”は、“死海の塩・硫黄、シナイのトルコ石、紅海の宝贝、アナトリアの黒曜石”等の流通を取り仕切る要めとしてパレスティナが発達した。更に交易の目玉とも言える黒曜石を扱った“アナトリアの原始交易による文化複合 (BC5600)”として“地中海、紅海、シリア、キリキアの交易網の要所”となり、同じ頃、“バルカン北部に交易ステーション形成 (スタルティエボ、ドルドの集落に地中海の貝装身具、トルドスの銅、ボスニアの辰砂などの交易品)、更に東地中海の海上ルートの萌芽”が見える等、交易による広範な海上ルートが発展し始めるに至った。こうした交易の発展には、契約に伴う記録化の必要が大いに強調され、発展し続けるようになった。

**天文関係** 食糧確保の手段としての農耕も技術的に向上するが、収穫増を期するには、品種の選別、作業内容、その手順も肝要だが、これら以上に重要な要件は、天然自然による環境、風土のもたらす諸条件である。それぞれの地方における地理的位置、地形、地質等であり、当該地方の気象、季節、天候、気象など、更に日照、降雨量、風向き・速さ等、変動推移を含める天体から起こる総ての事象が農耕の成否を決定づける鍵である。

このような厳しい条件に関する“情報”の伝達、入手は、不可欠であった。これらへの対応は、農耕従事者にとって必要であり、別の項、宗教関係でも豊饒の祈願が加わっている。処が、農耕は、技法より、経験、労力への依存度の高い故か、記録化の必要度は別とし、品目、数量程度の記録にとどめても、結構役立った農作領域であったろう。

関連する記事としては、僅かに、BC4713 “バビロニア暦の初日とされる (メソポタミア)”、BC4241 “恒星年の発見、太陽暦のはじまり (1年=365日) (エジプト)” BC3800 “シュメール太陰暦成立 (1年=365日+9時間) (シュメール)”が見られ、漸くBC2670頃、“宰相インホテプ、医学、天文学、建築学の大成 (エジプト)”と、他と並んで学問領域への加入が始まる。従って、情報の



記録化の初期には遅れており、時代がずれると共に、暦は一般大衆にとって手離せない時代が到来したのである。

社会・行政関係 “情報”の記録化の必要として末尾にあるのは、今迄述べてきた頃に比べ、基本的な社会、これと不即不離にして今日の近代社会に厳しい影響を与え続ける行政であるとの視点によるものである。

尚、この頃の初頭では、社会、行政の要素を成す“権力”“権限の行使”の説明上、その原点であった家族における首長の存在から述べる事とする。

最古の時代、最初にして最小の生活単位は家族であった。血縁による愛情に結ばれた生活共同体である。共同体が一致して行動を開始するには、先導者を必要とするのが一般的である。家族にとっても更に安定した生活を望む事は、仮令、それぞれ個々別々の個性を備え、それぞれの願いは別であっても、期待する望みは同じであろう。これらを調整するには、幸い、家族の中には、親権者としての家長（首長）の存在があった。家長としては総ての家族に等しく安定できる生活を導く義務と責任がある。その為には、一致協力できる体制づくりは容易でないこともあるが、愛情に基づく対応に応しい制御、統制によってその責めを果たすのであった。他者に対し、制御、統制できる力が権力であり、この権力を及ぼし得る範囲が権限であった。

各家族における首長としての家長は、家族愛に基づく義務と責任を拠点とし、一家を制御、統制する事によって一致協力、家族の安定した生活に導くのである。中には、数家族が同一の共同生活体と集合し、協力一致するならば、より大きな成果、収穫を期待できるであろうし、自ずと数家族合体の氏族として、これらの首長は、権力、権限が拡大する。

以上、家族の首長に備わる権力、権限は、生活共同体としては、成員増と共に権力一致がなされることによって、より安定した生活に進み、ひいては生産力増による余剰物資の増加となり、首長としてはこれらの管理の責任が増加し、これら物資の実体把握の必要から記録化が必要視されるに至った。

以上、人類初の生活共同体として家族が形成されて、首長の存在、その責務遂行に関わる制御、統制の必要から、権力、権限の行使がなされた。これを機に、当初、未発達だった家族社会も徐々に充実し、より上位の生活圏へと上昇し、集落、大集落から神殿都市へと次々に生活圏のレベルは向上し続けるが、相変わらず不変なのは首長の存在、及びその権力、権限であった。

生活圏が家族から1万2000年前頃“レヴァントに農耕文化”とあるので、もう既に集落の形成もあり、首長の存在はもとより、彼を助言する長老も居たかも知れない。同じくレヴァント周辺に集団墓も設けられた事などから、共同作業、共同出資も考えられ、首長の責務も増えつつあったであろう。当時の集落の資産の管理運営から記録化の必要は、計数、絵文字等による記標の程度と思われる。早くから広まった信仰心の表れである祭祀の場を取り仕切る専従者神官は、供物等の集積した物資の管理運用の責任も加わっていた。集落形成と共に、神官は首長と並び立って尽力する。更にレヴァントでは、1万2000年前“大集落イエリンコ成立し城壁で囲まれた大集落”がある。この大集落の特徴は、神殿を中心とした事であった。そのためには、住民の信仰心の高まりと、これ迄捧げられた物資の集積があったからであろう。これらの物資の量如何により、神官の位置づけとなる。BC5600“メソポタミアに灌漑技術発達”は、収穫増大もあるが、治水事業の一環であり着実な調査を要し、記録化は量・質共に必要であった。BC4500“南メソポタミアに神殿を社会中心とする都市形成開始”、BC4400“メソポタミア神殿都市”続出し、生活圏増大になる。首長の存在、権力、権限の行使の原則は相も変わらず、生活圏の拡がりに倍増倍増を重ね、情報の記録化要求の

切実さ頂点に達するに至る。

## 抽象から具象へ、そして線描

450万年前に、“猿人の母指対向、モノをつかんでつかう（アワッシュ溪谷の猿人遺跡（エチオピア）”もあって、“手”の発達が始められる。以下、“脳”の働きによる“手”の活躍が続くことになる。

最初の人類と言われる猿人は、500万年前“自然石、自然棒などを道具として利用開始”以降、自然石を打ち欠いた“打製石器”、これに“刃をつけたチョッパー”<sup>③</sup>を製作、加工の技術を始める。原人の時代には、200万年前、両側を打ち欠いた“チョッピングツール製作”次の原人は握槌、握斧と言う、“ハンドアックス出現”するのは140万年前で、“一端がとがった石器で、とがった側は両面から加工され”“物を切ったり、削ったり、握ったり”するのに使われたとみられる。また、“錐や彫刻刀のような鋭い小型の石器も作られるようになった”<sup>④</sup>と述べている。

このように、製作加工された石器が、道具として広く使われ始めたのみならず、前記“チョッパー”“ハンドアックス”など、製作加工の諸技法も次々と開発され、10数万年前の旧人時代になり、イメージ先行——“脳”の働きの格段の発達を窺うことができる——による活気的な“ルバロワ技法”<sup>⑤</sup>の開発（12万年前）、更に時代が降った5万2千年前、火打ち石に使う硬い石“フリント”<sup>⑥</sup>が、イギリスに伝わり、“石刃技法”が各地に広く普及した。

既述のように、“手”の働きにより石器の製作から、道具として加工するに当たった諸技法を次々と開発し続けるに際し、これらの進歩の底流には、“脳”の機能発揮として“情報伝達”があった。その初めての手段は、当時未発達ではあったが、“言語萌芽（100万年前）”から始まって“片言”による早期の“言語の使用”であったと思われる。この“片言”とは言え、伝達を簡便、容易に可能とする時代であったので、年代を比較的限られた世代に集中して、当時としては活気的な技法の開発が続いた要因であったであろう。

既に述べてきたが、“手”の活用は、直接的な道具の作製、ついで諸技法の開発は、より高度な二次道具をも作製、3万7000年前には“削る・切る・握る・調整”等を可能とするに至った。加えて気候温暖化の前兆は、“草原化”をもたらすことが契機となり、食用植物の生産、即ち、原始農耕が始まり、便利な道具の作製、使用は大いに役立った筈である。

こうして、“食・住・衣”と係わる諸条件も充足しつつあり、この時代の新人達は、これまでの多くの人類が生命維持に汲々してきた生活から、僅かかも知れないが解放され、余裕ある生活に恵まれたようである。

この余裕ある生活であることは、ヨーロッパを中心に小規模ながら諸文化が発達、中でもヨーロッパ南部、フランス・スペインに跨るピレネ地方に開いたオーリニャック文化が、南部から中部・東部へと拡がりを見せる。

その中に3万2000年前の“輪郭線を強調する線描画、刻線画出現”とあり、重大な意義を含むものと筆者は評価したい。即ち、“最古の刻線画”であるとの断定は、今後における新規の発見、研究に懸かるとは言え、現今では否定し難い史実であると見做したい。

この線描を発端として多様化し、発達して新しい芸術を生み、その一部に洞窟絵画、絵文字を生み、更に記号として“文字”“数字”を出現させた後、“情報伝達”の手段として発達し続ける“言語の使用”を補完し、より有効な伝達手段として“文字の使用”が創始され、人類発達史上、レベルの高い“情報伝達”の媒体として持続した。以降、前記“線描画、刻線画”と同じ頃“動物線描



画” ヴィーナスの“レリーフ”と続き、2万7000年前頃“動物線刻石”2万年前、“動物浮彫群”が遺されている。や、遅れての1万9000年前には有名な“アルタミラ洞窟のマカロニ（3本の指で描いた屈曲線）”などを初めとし、1万5000年前以降から5000年前後までの時代には、実生活に結びつく人物、動物を題材とするかのように指先絵画、素描、これらの絵画に染料の吹きつけ、着色化、平塗り、線陰、ボカシを施す手法もある。初めの写実から、肉厚のレリーフと線刻を組み合わせた立体画法、魚の調理加工で判った知識によるX線画法、更には浮遊の姿を捉えて描き、動き・スピード感の表現など生活態様から知った現実の描写の後に、実像の省略化は抽象図を生み、平行線、文様、果ては幾何学文様をも表現するなど技法の多様化もさりながら、描写の用具も草・毛・羽、噛み砕いた筆も多様に広がる。素材も平地、壁面から、1万2000年前、最古の“土器”の作製は、生活に不可欠な用品となったが、前述の描写の対象に加わり、“土器”は身近にある便利、不可欠な用品で広く普及したのに伴い、“土器”への線描も進む。

“最古の刻線画”の技法は、一見、論ずる価値もない些少な一事と見過ごし勝ちである。

然し、“情報伝達”の視点から言えば、絶対に看過し得ない重要な事柄の一である。この“線画”が描かれた当初の発端は、多分、全くの偶然性が引き出した作為だったのではなからうか。これを見てなんらかの目的に役立つ目印、或は何かの内容を表わす標示にしたのではあるまいか。このような大進歩の出発点は、“最古の刻線画”の出現にある事を強調したい。

## 数の発意及び計数・計量

いつの時代に、人類は数える行動を始めたであろうか。いとも簡単な行為だがその詮索は難しい。視覚に映じた視界のなかで、形状から推して異同を分別したであろうが、その根拠とする基準の設定は、脳機能の発達度に委ねざるを得ないが、これ又甚だ困難である。然し、前項の抽象から具象への発想を是とするならば、片言による発声から、視界に映った形体を同形・同類の群と、それら以外の異形とする区別し、個々に見出した線描を活用、同形・同類を並べる事で数の発意とする。即ち、刻線画を複数にし、増えた本数の合計を示すことが、数える行為の創始であろう。

これらの刻描の多くは、洞窟などに発見されたようであるが、それと言うのも、刻描も他の多くの遺跡、遺物と同様に、それぞれの地方における自然環境の諸条件の相違によるものである。“手”の直接的な仕事を始め、製作された“道具”、及び加工された“二次道具”等を用具とし、入手、及び加工容易な用材との組合せが適応し、普及できた遺物の多くが今日迄に発見されるに至ったのである。

用具は別として、これらの用材として、石・粘土・金属・木片・植物・角・骨等が挙げられる。なかでも、生活の場に散在する石や泥土の利用は早く、初期農耕村落の形成による自給自足を目指した西アジアの人類は、“家畜を数え、収穫された穀物量を量るために、二・三センチ程の粘土のかたまりが用いられたという。”<sup>⑤</sup>BC8000～BC7500の頃であるが、適量の水分を含んだ粘土は、加工が易しく、造形も容易であるので、前記の地方では、粘土をちぎって、円球、平内盤、円筒、三角錐、円錐形などが作りあげられ、種別、数量の表示にしたようである。これらの粘土を用材とする着想は、間もなく出現の“印章”や、各地で比較的長期間使われた“粘土板”に発達し、いろいろな造形は、幾何学文様の普及と深い関連があるようである。こうした手法により様々な形状をもたらした。“粘土”をトークンと呼び、これらの仕組みをトークン・システムとするとの仮説もある<sup>⑥</sup>。

BC4000の時代ともなると、南部メソポタミア・ウルクでは、交易が盛んとなり、離れた植民地



での収税の必要から、複雑な形状のトークンに、線描、穴など加えてから、当初はいくつものトークンを保存する目的で、紐を通したり、より大きな粘土円球で包み表面にトークンや印章を押印するとか、平らな粘土板にトークンを直接押しつける等、“トーク押印タブレット”<sup>⑧</sup>が発明される。

このタブレットは、数字と文字の違いはあるが、後に大いに発達した文字記録の粘土板の前身か、原型とも言えるトークンであった。

同じ頃、“エジプトで十進法”が発達し始め、同じエジプトでは、“数字と数字の発生（足し算・引き算・掛け算・割り算・分数）”と進歩したのも、前記BC4000の頃であった。

このように、“数の発意”から始まって、既に数字、数学などと著しく進歩したが、その背景には、“数える”行為を切実に必要として“数の発意”が逐次進歩し、計数、計量がなされる。最初の発達は、余剰食糧の増加、人口増と言われるが、飛躍的發展を促進させたのは、“神殿の権威の高まり”であるとの説を唱える学者もあり、その経緯を次のように述べている。

この島のような場所（注、メソポタミアの低地テルを指す）に人口は集中した。そして島ごとに社会のまとまりの象徴であり、権威である神殿が生まれた。（中略）神殿の権威の高まりは、遠隔地との交易の隆盛と関連したいた。（中略）神殿はこの交易の統制者にしてプロモーターであり、神殿の祭祀は交易の機会を提供することにつながった。交易と神殿との結合が、生産と人口増大を刺激し、統治技術を洗練させ、やがては文字の発明をもたらしたのである。<sup>⑨</sup>と、些か長い引用ではあるが、計数、計量の発達を納得させる記述である。

数の発意は、“最古の刻線画”と結合し、神殿に関連する“数”は具体的な記号となり、これ迄、“脳”の働きの一部であった“記憶”のみに依存していた“数える”行為が、“数”として具象的な“記録化”の初歩ともなったのであり、“情報の記録化”の契機が生じ、各地方では、それぞれの風土におけるそれぞれの用具、用材により対応した“記録化”への試みがなされるのであった。

これらの“情報の記録化”への試みとは、抽象的内容の“数の発意”と具体的な“刻線画”の活用とドッキングし、新しい具象的な“数”と進化したものであり、言わば、単なるシグナルが、シンボル化し、特定された意味を表わす“数字”として成立したものである。このように、シングルがシンボル化した例として最も普及発達したのは、入手、加工を簡易とする湿った土“粘土”であるが、木板、角、骨などもある。なかでも広汎な地域で入手、操作も容易な結縄は発達した。結縄は文字通り、一縄に結び目を作るのが基本であるが、その数、形状により異なる表示とし、ペルー、中国（台湾、沖縄にも）北米先住民など有名である。方式、用材に更に工夫したものに、北アメリカに“貝殻帯”もある。

こうしたシングルからシンボル化し、完成に至らない一群は、比較的多地方にわたり、それぞれ独自の方式、形状であるので、総括的呼称として、“記標<sup>⑩</sup>”と言われている。

これらも、異色のようなだが、シンボル化の段階ではあるが、“情報の記録化”の初期の記号として触れ、結縄、貝殻帯、粘土のボールなどの記標とし発達したのであった。

一方、“刻線画に始まった線描も、道具の発達もあって、手法、技法、加工も加わり、曲線、文様と進歩し、描写の一部では、写実指向を求めて絵画が盛んとなって、多くの遺跡、遺物に描かれるに至った。

これ迄の描写と絵画様式とを比べ、その違いは、それぞれに描かれた“情報量”の差である。“情報量”の多い絵画の方が判り易く、その違いは、抽象と具象の差である。

人類は、早くから“意思伝達”の必要により、音声を利用して、単に抽象であった発声を、より具象である“片言”、更には固定化して、“言語”の使用を実現、“情報伝達”の手段に組み入れた。処が、この手段にも、致命的とも言える弱点があった。発声に依存する伝達は、到達範囲に限界が



あるのみならず、発声終了と同時に消滅する事であった。その生活圏が、家族社会、或いは小さい規模の集落の段階ではともかく、生活圏拡大と共に、“言語の使用”では、自然風土のもたらす環境条件と併行して進歩する新しい社会への対応に迫られ、地域言語、方言ともなって発達した。

## 具象の極み 絵文字

是れ迄、抽象的な“言語の使用”に頼ってきた人類は、“最古の刻線画”を出発点にして形に残す線描、曲線、文様と進み、具象の極みとして絵画に到達した。

実生活を通して、ある事物の存在を視覚として捉え、その事物に“言語”としての固定した音声に既に与え、呼称として通用していた。別の機会に、実物に類似した形状による絵画があった。この事物とそれに似た絵画とは、共通性の多いことから同類と見做され、同一の呼称が与えられる事になる。抽象から抜けられない言語と、具象の極みだった絵画が結合する。これにより、後世、絵文字と呼ぶ“情報の記録化”の第一歩を踏み出すことができたのである。

BC3000頃、“ナルメル王の奉納用化粧板（石製のパレット）”<sup>⑧</sup>の裏面には、上下エジプトを統一した王が、下エジプト住民6000人を捕虜とした場面を描き、第一王朝樹立の偉勲を顕彰するかのようである。同じ頃、シュメールのウル王墓の出土品の一つに“梯形の箱をつくっていた板”<sup>⑨</sup>にシュメール人の軍隊組織を三段に描き、下段では武装兵士の戦う姿が描かれ、その中の戦車を索く4頭の馬脚は、スピード感溢れる動きを描いている。

絵文字の進歩は、BC4000“メソポタミアのエリドゥ市に絵文字（湿った粘土に書く）”、同じ頃“ユーフラテス河東岸に原エラム絵文字粘土板”更に、“ウルク白神殿の司祭、シュメール文神の発明（3000の絵文字）”、BC3300“サソリ王の棍棒頭に絵文字（シリア）”、間もないBC3200頃だが、“シュメール絵文字、楔形文字に移行開始”の時代ともなった。

メソポタミアは、地勢からみてチグリス、ユーフラテス両河に囲まれた沖積平野であるので、粘土板が盛んに用いられたのも当然であるし、これに描かれた記号は保存にもよく耐え、大量な尊い文化遺産として伝わった。

“絵文字”が進歩してきたなかに、“印章”が遺されていた。最古の印章としては、BC5200頃、西アジアの“チャタル・フュック大山爆発、狩猟人の死体をついばむ鳥の絵画、土製印章”があったとの記事がある。その後は、BC3400頃、“シュメール円筒印章出現”と続く。ついでBC3000頃、“所有権を示す押印出現”とその利用目的まで記されている。チャタル・フュックの遺物は土製だが、多くは石灰岩を始め、石製が多い。シュメールの初期はスタンプ型だが、BC3400頃からは円筒型となったようである。スタンプ型は説明するまでもないが、円筒型の場合、円筒の外周に浮彫りの絵を描き、円筒の上部に動物など小さな像を作りつけ、指先などを使って柔らかい粘土の上を一回り回転させると、粘土の上に小さい横長の絵が浮かび出る。その後、円筒の円心部分を上下に貫くように穴をあけ、糸を通してその両端をつまんで転がす式の印章とするように改めた。材質は、石灰岩、滑石、後にはガラス製も作るようにして紀元前2世紀頃まで使われた。その後の印章は、インダス文明、BC2300頃“インダス印章出現”西アジアを経て、支那へ伝播、この間、絵文字も文字に進化するが、国によって絶えるが、日本では、生活上重要な印章となるに至った。

“情報の記録化”の先駆“絵文字”ではあるが、凡そ世界文明発祥の各地から近隣に伝播するもあり、遠隔の地に独自の絵文字の開発を試み、工夫に工夫を重ね、漢字文化圏の構築するに至った支那や、時代は下がるがマヤ、アステカがあり、解読困難も多い。“絵文字”は抽象的な事物の具象化への試みであり、人類初の“記録化”の踏み出しとして評価するのが筆者の所見である。（終り）



参考文献、引用文献

○ 本稿中、頻出する“ ”内は、序でお断りしたように、次の文献

松岡正剛監修：情報の歴史 90’

の引用である。

① 大貫良夫等共著：世界の歴史 1 人類の起源と古代オリエント 98’ p237

② 前と同じ p162－3

③ 横山紘一等編：クロニク世界全史 94’ p20

④⑤⑥ 前③と同じ p21

⑦⑧⑨ 前②と同じ

⑩ ①と同じ p138～9

⑪ 田代安定：沖縄結縄考 昭和20年 参照

⑫⑬ ③と同じ p37